

義 經

司馬遼太郎

美 奴

昭和四三年五月五日 第一刷
昭和五二年四月一日 第二十二刷

著 者 司 馬 遼 太 郎
し ば り ょう た ろ う

発 行 者 樫 原 雅 春

発 行 所 株 式 公 司 文 藝 春 秋
会 社

一〇二東京都千代田区紀尾井町3
電話東京(265)一二二(代表)

ク一乱丁・落丁のものはお取替えいたします

印刷・凸版印刷株式会社 製本・加藤製本 製函・加藤製函

©1968 RYOTARO SHIBA Printed in Japan

目

次

寝腐れの殿	七
四条の聖	二六
稚児懺法	四四
鏡の宿	六一
蛭ヶ小島	七九
白河ノ関	九七
弁慶	一一四
京の源氏	一三二
富士川	一五一
鎌倉の新府	一七〇
木曾殿	一八七
木曾の猪舞	二〇六
法住寺炎上	二二六
旭將軍一騎	二四四

堀川館	二六二
鶉越	二八一
八葉の車	二九九
屋島へ	三一七
讃岐の海	三三五
源氏八百艘	三五二
壇ノ浦	三七〇
波の上	三八七
都大路	四〇五
磯ノ禪師	四二二
腰越状	四三九
堀川夜討	四五五
浦の逆波	四七一

裴
幘
杉
本
健
吉

義

經

寝腐れの殿

一

都には、貴族の榮華がある。

この物語は、そういう古い世のことだ。しかし人間の歎くこと笑うことは、いまもむかしもかわらない。

都の一条坊門のあたりといえば、辻に樗の樹がある。市人はみな知っている。

その枝の張る南側に破れ築地があつて、そこに藤原長成という中年の公家が住んでいた。

「一条長成」

というのが通称である。

「寝腐れの殿」

というあだ名もあつた。どこことなく様子が貧相でいつも寝起きの面のように冴えない、という意味であらう。

藤原という姓がついているが、末家のうまれで立身の見込みはまったくなく、四十を過ぎてやっと大藏卿になった。

大藏省の長官ではあるが、これでは貴族的身分とはいえず、まずまずの宮廷官僚というところであつた。

「もはやわしの一生も寝腐れよ」

というのが、口癖であつた。寝腐れはててこれ以上の出世はのぞめない、という意味である。

「となれば、この一期を生きた証に、よいおなご添いたい。それのみが望みゆえ、たれぞよい女を世話してくりやらぬか」

と人にも言い、神仏にも願ひ（阿呆なはなしだが）、もはや足摺りするような氣持でひたすらに望みつづけていた。

こんな寝腐れにも、友人はある。

「指ノ法師」

といううちもない男だ。

法師といつても寺と僧階をもつた坊主ではなく、市井住まいのまま法師拵えをし、毎日ひたすらに色ごとの話ばかりして日を送っている。

藤原氏の出で、安公家の長成とは従兄弟どうしにあたる。同じ藤原氏でも値の安いほうの血統の出だから、わかいころから官にもありつけず、五条あたりの遊女に養われたりして送っていたが、中年に近くなつてから、妹の遺領がころがりこんできた。

一族の者が、

「ただでは呉れてやるまい。頭を剃りこぼって墨染の一枚もまとい、かの者（妹）の供養でもするなら、相続をみとめ

てやろう」

ということで、法師姿にさせられてしまった。いわば、遺領坊主というやつだ。

長雨が降りつづいている日、この指ノ法師が他人の網代車を借りて一条坊門の長成の屋敷をたずねてきたことからこの長い物語ははじまる。

「居るかや、居るかや」

と、法師は土門を掻いくぐった。土門とは築地塀の途中を割りこぼって作った屋根なしの門のことで、法師が他家を訪問するばあい、こういうわけかこの門をくぐる。

「ほう、法師が」

長成はちょうど退屈していたところだからいそいで寢殿に招じ入れた。寢殿といっても庇がおとしの嵐でこわれたままになっているひどいやぶれやである。

二人は、円座を敷いて対座した。

（相変わらず、貧相な顔だ）

どちらも、同時に思った。

法師も長成の寝腐れた性根や面つきを軽蔑しているが、長成も法師の世の渡りようを尊敬してはいない。そのくせたがいにより嫌悪を感じるほどにうまがあうのである。

「きょうは用があつてきた」

「そりや珍かな」

「当家に福をもってきたわ。福は福でも、土地ではない。いやさ土地も五穀がみのるが、この福も物がみのる」

「硬いものか、やわらかいものか」

「おうさ、柔いものよ」

「女か。――」

長成は哀れにも叫び声を出していた。

「その前に、酒を頂戴したいな」

法師はぬけめなくいった。

長成は、「おう、まことに。これは、そうをした」と童

もよばず、自分で台所へ駆けこんで酒の支度をしたというから、よほど肝の躍る思いだったのであろう。

藤原長成の心情は、可憐といつていい。

辛い、先年、妻をなくした。

これが、なにごともうだつのがあらぬ長成の半生のなかでは唯一の幸福だったろう。あらたに北ノ方を迎える希望ができたのである。

（わしにも、佳いおなごをもてる機会ができた）

とおもった。

なるほど男ぶりさえよければ、都のならいで幾十人でも女はできる。ところが、長成にかぎって若いころから願ひてくれた女というものがいない。

結局、屋敷の北の対屋に住まわせる、つまり正妻にする、という条件意外にこれはという女が来っこない。その北の対屋には二十年狐のような妻が住み古していたが、それが先年死んだ。

（わしの一生にもまだ光明があつたか）

と、長成がなんととはなく浮き立ちはじめたのは、その頃からである。

酒器をもつて座にもどり、

「さあ法師、きこう。どんな娘だ」

と男みこんだ。

「生娘ではない」

「ああよいとも。これはというほどの女には仇し男の四人

や五人はいるものだ」

「じつは子供が四人いる」

「こりやこりや」

長成はあきれた。法師は手で制し、

「待て待て。わしの話をきいてからものを言え。その女人の容色たるや、漢の李夫人、唐の楊貴妃もこれには過ぎじ

というほどのものぞ」

「法師、それほど女人がわが家の北の対屋に住んでくれるのか」

長成の顔つきがかわった。

「それほど女人ならば子供が何人あつてもよいわ。わしが養育するぞ。して、誰が家のむすめで、何という名だ」

「我御料、名をきいて悶絶するな」

「これはこれは、関白の出戻り娘でもあんなるや」

「関白どころか、無位無官の地下人の娘だ」

「よいとも。わしは家柄をいわぬ」

言わぬのが、道理である。貴族の家では美貌の娘がうま

れるとそれをつるに榮達しようというのが普通だ。だから藤原長成くんだりの安公家にまで貴族出身の美貌の娘が舞いおりてくるわけがない。とにかく長成のもとに来る同族からの縁談はこれでも人かとおもわれる容貌の女ばかりなのである。

「とにかくわしは妻選びの方針をきめているのだ。藤原姓の落穂をひろうよりも、地下にうずもれた玉を拾いたい」

「賢明だ」

法師は、深くうなずいた。この法師もすれっからしの下級貴族だから長成の方針がいかにも得策を知っている。美貌の地下女に子種を銜ませて美貌の娘を生む。それが長じて藤原氏の宗家や権門の息子の目にとまれば父親の出世にも希望がもてるというわけだ。

「法師、まだ名はきいていない」

「聞いて悶絶するな」

「その文言、さつきもきいた」

「常磐だ」

「と、ときわとは、かの常磐か」

「左様、かの常磐よ」

法師は、ほんと石を投げこんで池の面の波紋を楽しむような落着きようでうなずいた。

「そ、それは毒じゃ」

と長成は叫んだ。常磐御前ならば洛中洛外随一の美女であることは、市井の物売り女でも知っている。しかし、

「毒」

という言葉が、偶然、長成の口をついて出た。そのとおりであろう。河豚の肉は美味であることは知られているが、その血に毒がある。食いたい命が惜しい、といわれる実感が、常磐御前という名にはある。

二

常磐は、関屋せきやという女の娘である。市塵しじんにまみれて暮らしている階級の者の子だから、父親まではわからない。

洛中の評判になったのは、十三のときである。

その年、九条院で美人選びがあった。

藤原伊通ふじはらいどうという貴族が、その娘多子たしこ（九条院）を近衛天皇の中宮に納れ奉ることに成功した。そのよろこびもあって、多子の侍女として空前の美女を選びたいと思ったのである。（あれは久安六年のころだったかな）

と、長成も記憶していた。

たかだか十年前のことだが、藤原貴族にとっては遠い栄華の夢のような気がする。なぜならばその後十年の間に平家・源氏といった武家がにわかに頭をもたげ、都で戦乱が相次ぎ、ついに平治ノ乱で源氏が没落し、平家が大きく興隆して、あらうことか宮廷に進出し、藤原氏をおさえ、宮廷の顯職けんしやくは平家の一門一族をもって占め、ついにはその一族で日本の六十余州の支配者になりおおせている。

（夢のようだ）

と長成が思うのは、藤原伊通がやってのけたあの美人選びのことである。藤原貴族最後の栄華を象徴する行事と言えはすまいか。

なにしろ、都の凡下ぼげの娘どものうち美人を千人選んだのである。そのなかから百人をえらび、さらに十人にしぼり、そのうちの九人を斥けしりぞけ、たった一人を選抜した。それが、常磐であった。

（非常な人気だったな）

長成も十年前、この権門にお祝いに行つて庭さきでその常磐をみたことがある。わずか十三歳でしかない少女だったが、魚籃ぎょらん観音の再来ではあるまいかと息をのんだことであつた。

その常磐は、身分は九条院多子の雑仕女ざうしめでしかない。最下級の女官なのである。当時の藤原氏の権勢というのは、たかが姫君付きの雑仕女をえらぶのに洛中を湧きあがらせるほどの人選びを興行することができた、ということにあるであらう。

（たれが常磐を手に入れるか）

ということも、諸大夫以下の下級官人たちのあいだで騒がれたようだった。

さすがに貴族の子弟は、わざと黙殺していたようだった。彼等は色好みではあったが、めざすのは同じ貴族仲間の姫君たちで、雑仕女のもとには普通通ふつうわない。

「源義朝と出来ているらしい」

ということを長成がきいたのは、美女選びがあつてから二年後である。常磐は、十五歳であつた。

(体がまだ熟していない)

当時、長成は生唾をのむ思いでそれをおもひ、かつ一面では冷笑した。やはり牛は牛連れか、と思つたのである。

武家は貴族ではない。

源氏・平家の棟梁といつてもその官位も卑しく、藤原氏の目から見れば立つて歩く犬程度にしか思われていなかった。事実、彼等は犬のように藤原氏の権門に出入りし、その番犬の役目をはたしてきた。その見返りとして多少の官位をもらえれば狂喜した。

武家は、二流にわかれてゐる。

源氏と平家であつた。その勢力地図もくつきりしている。源氏は東国に地盤をもつて騎馬戦がつよく、平家は西国に地盤をもつて、海戦と貿易に長じていた。

棟梁は、源氏は為義・義朝であり、平家は清盛であつた。かれらは、親分といつていい。

法律的に、つまり国家の制度上諸国の武士を統制しているのではなく、「武士の棟梁」といつても私的な存在なのである。諸国の武士は、いわば地主である。その地主どもの私的利益を、源氏・平家の棟梁たちは代表し、代弁し、擁護してやる、ということに都に常駐し、藤原貴族の家に出入りし、地方の利益よかるべく周旋している。

そういう存在である。藤原貴族からみれば、源氏・平家

の棟梁の頼みごとをきいてやるかわりに、自分が政争をおこすときの軍兵として使う。

(牛は牛連れだ)

と長成がそのころ思つたのは、雑仕女の相手には源義朝の程度が相応だ、という意味だつた(むろん十年後のいま、保元・平治の乱を経て武家の価値が暴騰し、平家はついに天下をとるに至つたことを思うと、このころの実感は今昔の感がなきにしもあらずだが)。

とにもかくにも、源義朝が常磐のもとに通つていたころの武家はその程度だつた。

ところがその時分でも、武家は軍事力だけでなく財力の面でも、公家一般よりはるかに豊かだつた。

女の数が多い。

長成は、その点がうらやましかつた。義朝の父の為義などは、子供を四十六人もつくつた。そのなかで名も聞えぬ者もあつたが、長男の義朝、八男の為朝などは出色の子だつたといえる。

義朝も、その漁色は父にゆづらない。かれが常磐のもとに通ひはじめたのは齡の三十を過ぎたばかりだつたが、すでに男だけでも何人かの腹ちがいの子があつた。

淀川沿いの橋本宿の遊女に生ませた悪源太義平、修理大夫範兼という下級官人の娘に生ませた朝長、さらには東国と京を往来する途中、熱田大宮司藤原季範の娘を愛し、そのあいだにできた頼朝などがいいる。

(武家はみな有徳者よ)

と長成などはおもうのだ。有徳者というのは人柄がいいという意味ではなく、金持だという意味である。

義朝はよほど常磐を愛していたらしい。

常磐にだけは飽かずかよいつづけ、今若、乙若、牛若の三人の子を生ませた。

牛若が二つのとき、源氏の棟梁源義朝は三十八歳の若さで死んだ。

尋常な死に方ではない。世に「平治ノ乱」とよばれる天皇・上皇、公卿、源平を真二つに割っての争乱で平家に敗れ、都を脱出し、落武者になって尾張までたどりついてからもとの家人に殺された。それも風呂のなかであった。

(武家の世を渡ることのすさまじさよ)

と長成がおもったのは、尾張から送られてきた義朝の首が六条河原の獄門に梟けられたときである。

すでに肉の剝がれた腐れ首であったが、どうしたことか臉が閉まらず、両眼はなお腐らずに天をにらみ、砦石をならべたような齒が、地を啖わんばかりの勢いでしらじらと光っている。首になっても、恨みを地上に残すすさまじさは、公家の性根にはない。おなじ日本人でも、人種がちがうほどであった。

(怖や)

と長成は思い、数日、その首の相をおもいだすたびに胸が慄え、めしものどに通らなかった。

義朝が死に、源氏の武権が崩壊し、平家が都と諸国をおさえ、義朝の類を捜しだしては刑殺しはじめたころ、(常磐御前は、どうした)

という囁きが、都ではしきりと交された。

常磐には、源氏の御曹司というべき少年、幼童、嬰兒が、三人もいるのである。

むろん、彼女は源氏の壊滅を知った直後、都を逃げた。

あとからわかったことだが、最初は雪の中を清水寺へ逃げた。平治二年の正月のことである。常磐は、八つの今若と六つの乙若の手をひき、去年うまれたばかりの牛若を抱いて夜陰、清水の坂をのぼり、参籠所にたどりつき、観音の宝前に燈明をかけて終夜、三人の子の前途を祈った。

常磐は、美しい肉体をもっているほかさほどの教養もない。しかし普門品三十三巻と法華經三部は誦することばかり。それを夜の白むまで低誦しつづけた光景は、ながく都の人々の美しい口碑として残った。

そのあと清水山内のさる塔頭の僧にかくまわれたが、翌夜、寺を去り、京を脱け、途中山中をさまよいつつ大和に入り、宇陀郡竜門という里の伯父の家に隠れた。

「そういうことであつたな」

と、長成は指ノ法師に言い、自分の記憶をたしかめた。

「左様、よく覚えておられる。あとあと、常磐御前の都落ちの難渋を知って、都の者は袖をしぼったものよ」

その常磐は、ながく大和で忍んでいたわけではない。

清盛は嚴重な搜索を命じ、ついに行方が知れぬとわかる
と、常磐の母関屋をからめとり、六波羅役所にひきさて、
手痛く調べた。

そのうわさが常磐の耳に入った。たまりかねて常磐は都
にあらわれ、昔勤仕していた九条院御所を訪ねて、

「わたくしを幼き者もろとも、六波羅へお送り下されて母
の苦しみを止めて給わりませ」

とたのみ入った。

九条院は女院の御所で政治の外にある。さつそく常磐に
清げな衣装をあたえ車まで貸しあたえて六波羅に送りとど
けた。

尋問は、清盛みずからとりおこなった。清盛は最初から
常磐に興味があったのであろう。

(かの評判の常磐とはどのような女か)

と、つい尋問の場に出てしまった。これがこの男の末代
までの失敗になった。

清盛が白洲を望むと、そこで泣き崩れている常磐は地に
落ちて雨に打たれつづけている花のようであった。九条院
が整えてくれた華麗な衣装も、この情景に効果を添えたに
ちがいない。

しかも常磐の掻きくどく言葉こそ可憐であった。自分を
殺せ、というのである。母をたすけ給へ、と言ひ、

「三人の公達の御命まで助け候えとは申しませぬ。しかし
ながらまず私を殺してのち、いかようにもなしくだされ。

このうえ命を長らえて夜昼の嘆きを繰りかえすのに堪えら
れませぬ」といった。

その間、せきあがる涙で何度か絶句し、このためそばに
いる明けて六つの乙若が、母の顔をのぞきこんで、

「泣かずによく話を申し給え」

と心配そうにいった。そのいじらしさが、平家の検察官
たちの涙をさそった。おどろくべきことに、途中、座に堪
えられずに中座する者さえ数人も出た。東国の源氏武者の
強悍で復讐心につよいのにひきくらべ、涙もろさは西国の
平家侍の共通性であつたろう。かれらはこの繊細な心情美
のゆえに、のちに「平家物語」の作者に美しい主題をあた
えた。

清盛も、例外ではない。

つとめて仏頂面ですわっていたが、やがて彼自身が自分
に不快になるほど涙を催し、断獄者としての資格をうしな
った。

ただその途中、

「常磐、面をあげやれい」

といったのは単なる人情ではない。多少の好色が入って
いる。

その瞬間に歴史が決定したといつていい。

尋問がおわつたあと、

「たすけてやれ」

と、執行官たちにいった。みな驚いた。義朝の長男悪源

太義平は逢坂山で捕えられ、六条河原で斬られているのだ。ただ奇妙な例外を、清盛はすでに作ってしまっている。

義朝三男の頼朝である。十三歳で従軍し、父とともに東国へ落ちる途中、疲労と吹雪のために父の一行からはぐれ、美濃で捕えられ、六波羅に送られた。

その頼朝を、思わぬ者が命乞いした。清盛の継母の池ノ禪尼である。

平家的発想は、この尼にいたってもっとも極端であった。尼にとって、頼朝などは顔をも知らぬ源氏の子である。ところが尼は、家盛という実子を若死させている。

「その家盛に似て居やる。家盛の供養と思ひあの子供を助けてあげてたもれ」

と、清盛に泣きついたのである。清盛が、

「武門の子は怖うござる」

と道理をさとして拒絶すると、この継母は狂乱せんばかりに掻き口説き、ついには「継母なるがゆえに私を軽んじやるのか。ああお父様（忠盛）が生きておわせばかようなあしらいは受けぬであらうに」とまでいったから清盛も閉口して頼朝の一命をたすけてしまった。罪は伊豆へ流罪、という寛刑であった。

もはや清盛には、刑の基準がない。池ノ禪尼の奇妙な人情論に押し切られて頼朝をたすけた以上、常磐にのみつくあたるわけにはいかない。まして常磐の嬪やかな心情に、清盛はすくなくならず動揺している。

「三人とも、たすけてやれ」

といった。この場合、常磐が醜女であれば清盛もこういう情緒的処置はとらなかつたであろう。

証拠がある。

清盛はこのあと常磐を六波羅に召し、塗籠の夜の御座にひき入れ、その体を堪能した。結果的には、三児をたすけた代償だったといっている。

藤原長成の察するところ、清盛は元来好奇心のつよい男で、

「義朝の想い女の肌のぐあいはどうなっているのであるう」

と、そんな子供っぽい興味で常磐の衣をひとがさねずつ剥ぎとったにちがいない。

多弁な都育ちだから、

「かようなときは、かの義朝はどうしやったい」

と、常磐を抱きつつ趣味のわるい質問も発したに相違ない。

（面白かつたろう）

と、長成などは、自分自身ではなんの行動もできぬ無気力な生活人だけに、ぞくぞくする思いでそれを想像するのだ。

清盛にすれば、梟首にした源氏の棟梁がこの世に残した情婦を抱くのだ。常磐を夜の御座で裸形にし、その肌を嗅ぎ、臍をなで、女陰に手を触れ、自在に弄ったとき、はじ